ミニたまむし　No.505　2022 年 11 月　グループ多摩虫

11 月 7 日は立冬でした。七十二侯では、今頃は「地始凍（地はじめて凍る）」というようです。凍るというのは大げさで、霜が降りたり霜柱ができたりといったところでしょうか。東京の初霜は 12 月 23 日ですが（1991-2020 年の平均）、水戸、名古屋、京都、高知、熊本などでは 11 月中に初霜が観測されています（同左）。ついこの間まで「暑い！暑い！」などと言っていたのですが、冬はもうすぐ。

40 年も前のことですが、ロッキー山脈東麓の町に 2 年ほど住んでいたことがあります。そこは、本当に夏と冬しかないようなところ。4 月のある日、それまでの氷点下の日々から一転し、いきなり 20℃ぐらいまで気温が上がります。そして、一斉に樹々が芽吹き花が咲き、アメリカ人たちは T シャツに短パンで出歩きはじめます。この日が夏の始まりなのです。

それでは、ミニたま第 505 号をお届けします。お暇な方は末尾の「付録」もご笑覧ください。

（総務担当幹事：後藤　健）

【11 月期例会（本日）の概要】

日時：2022 年（令和 4 年）11 月 15 日（火）　18:30~20:30
場所：武蔵野公会堂　第 1・第 2 合同会議室
講師：須田 真一（すだ しんいち）さん
略歴：1968 年東京都杉並区生まれ。同区在住。東京大学総合研究博物館研究事業協力者。東京農業大学農学部、建設省土木研究所環境部、東京大学大学院農学生命科学研究科、中央大学理工学部を経て 2019 年より現所属。日本トンボ学会副会長、久保川イーハトーブ自然再生協議会副会長・主席研究員、東京都自然環境保全審議会臨時委員、東京都の保護上重要な野生生物種に関する検討会委員・昆虫類専門部会長。専門は昆虫学・保全生態学。
演題：『東京の昆虫と環境の移り変わり・・・昆虫標本の価値を考える。』

皆さんが永年採集・収集した昆虫標本。これ等の標本がなぜ貴重なのか、どの様に活用されるべきなのか、その行く先は・・・皆さんが抱える基本的な問題を「第 1 部」で考えます。その上で「第 2 部」で参加者の皆さんにも加わっていただき対応を議論します。

第 1 部：演者から、ご自身の経歴や東京の自然環境の変化、ご尊父須田孫七氏からの教訓、標本の散逸問題、コレクションの重要性、後世へ残していくことの意義や価値、などについて映像を交えてお話しを伺います。

第 2 部：第 1 部のテーマを踏まえて座談会形式にて参加者の方々とのディスカッションを通してこの問題を深堀りします。

司会進行は多摩虫会員を予定。

なお、東京都におけるコロナ感染は寒さに伴い第 8 波が心配され増加に転じています。ご参加される場合は下記により各自のご判断と当日のご注意をお願いいたします。

1. 当日の検温や抗原検査で各自体調と陰性を確認していただく。
2. 会場では手先のアルコール消毒をお願いします。
3. 例会中は終始マスクの着用をお願いします。
4. 座席の間隔を十分に取ってください。

月例終了後の会食は予定いたしません。

（企画担当幹事）

【今後の例会予定】

12 月 20 日（火）（第 3 火曜日）18:30-20:30　武蔵野公会堂　第 1・第 2 合同会議室

【連絡事項】

（１）杉並科学フェスタが来年１月 15 日（日）に開催され、鱗粉転写や標本展示など多摩虫から数名の協力者をお願いしたい。（宮内会員）（10 月期例会の際に連絡）

（２）朝日会員を経由して、日本蝶類科学学会からバタフライズホーラム（11 月 20 日日曜日）の案内が届いています。（詳細は別添参照のこと）（福田代表）（10 月 18 日に ML で連絡）

【10 月期例会の概要】

日時：2022 年（令和４年）10 月１６日（日）　18:30~20:30
場所：武蔵野公会堂第１・第２合同会議室
参加者：21 名
概要：コロナ禍の第７波は落ち着いてきたものの、参加会員にはマスク着用などコロナ感染の注意をお願いして本年４回目の対面式の月例会となりました。講演者の大野会員と補助役のお孫さん（大野 裕生さん）には厚く御礼を申し上げます。
講演の要旨は以下のとおりです。

講師：大野 和美（おおの かずみ）さん（グループ多摩虫前代表　現グループ多摩虫相談役）
演題：『神の地　雪域高原（チベット）に、白い妖精を求めて』

大野氏は２００６年６月３０日から１１泊１２日の日程で「むし社」主催の「中央チベット昆虫調査ツアー」へ参加し標高５０００米を超える氷河と荒涼たる荒れ地にパルを追った。同地域への採集行はその後２０１０年６月に第２回が計画されたが中国側の事情から許可されず、この採集行が同地域での日本人による最後の採集・調査ツアーとなった。

この採集記録は２００７年２月に「月刊むし」４３２号に発表されたが、後に同行の熊本在住の清元邦彦氏（多摩虫会員）より未発表の蝶の寄贈を受けたこともあり、今回纏めて報告する次第である。

ツアーには１１名の参加があり空路北京から成都を経てラサへ入り、ラサを起点に数箇所を車で移動ながら宿泊して採集した。

採集地は標高４３００米－５３００米の高地で、高山病対策としてダイヤモックス錠を服用して臨んだが蝶を見つけても空気が希薄なため走ることは困難で、蝶が比較的集まる場所に陣取り待ち受ける採集方法となった。

チベットは５月から９月が夏であるが日中でも気温は１５度から２０度くらいで蝶は陽が射せば飛び出し、陽が陰れば岩陰に隠れるため採集は容易では無かった。
ラサ以外の宿泊した現地での食事は米などは洗わずに炊くので臭く日本人の口には合わない。採集の間高山病対策でペットボトルによる補水には気をつけた。因みにチベット語で蝶は「シャンティーン」と言う。

（ア）　ナンカルッツエでの採集（標高４８００米）
ここではチベット特産種のベリーラモンキチョウが山の下の平原に見られた。アンナキアゲハ（タカネキアゲハ）も得られたが、このキアゲハは日本産に比べて尾状突起が短く黒っぽい。他にはラダックコヒオドシ（未発表）、イザベルヒョウモンモドキ、ウスユキルリシジミなどが採れた。

（イ）　カロ峠での採集（標高５１００米－５３００米）
岩礫の間に広がる草付きでアッコウスバ、ウスグロウスバ、ヒデウスバが採れた。高標高のため陽が陰ると寒い。ウスグロウスバには同一産地でも黒いタイプと白いタイプが混生している。ヒデウスバは最も高標高地に産する中国特産種で翅の表裏の斑紋が類似している。パルは紫色の花を好んで訪花した。パルの食草のコリダリスには種類が多い。

（ウ）　ダンション・ラルゲー峠（標高５２００米－５３００米）
ウスグロウスバ、ヒメルリモンウスバ、チビタカネウスバ、ラベリーウスバ Mesapia 属のシロチョウ（未発表）、シロモンヒメシジミ、ディベルナールシロチョウが得られた。このうち

チビタカネは比較的低い所で、ラベリーは高所で見られた。

（エ）　ロンジン（４３００米）タングラシャンコウ（５０００米）での採集

ロンジンでは、ミカドウスバの新産地を発見した。ミカドウスバは広く分布する大型のパルで後翅の赤紋・青紋が美しい。タングラシャンコウでは、ガンスーニベニヒカゲ、ヒメルリモンウスバ、アッコウスバ、デイベルナールシロチョウ、ナミダジャノメ属の一種メ、Paralasa属のジャノメが得られ、後述の２種のジャノメは未発表である。

今回のチベット高原採集行で得られた蝶は２１種で内訳は；ウスバアゲハ亜科１０種、アゲハチョウ亜科１種、シロチョウ亜科３種、ヒメシジミ亜科２種、タテハチョウ亜科２種、ジャノメチョウ亜科３種であった。

補足・Ｑ＆A

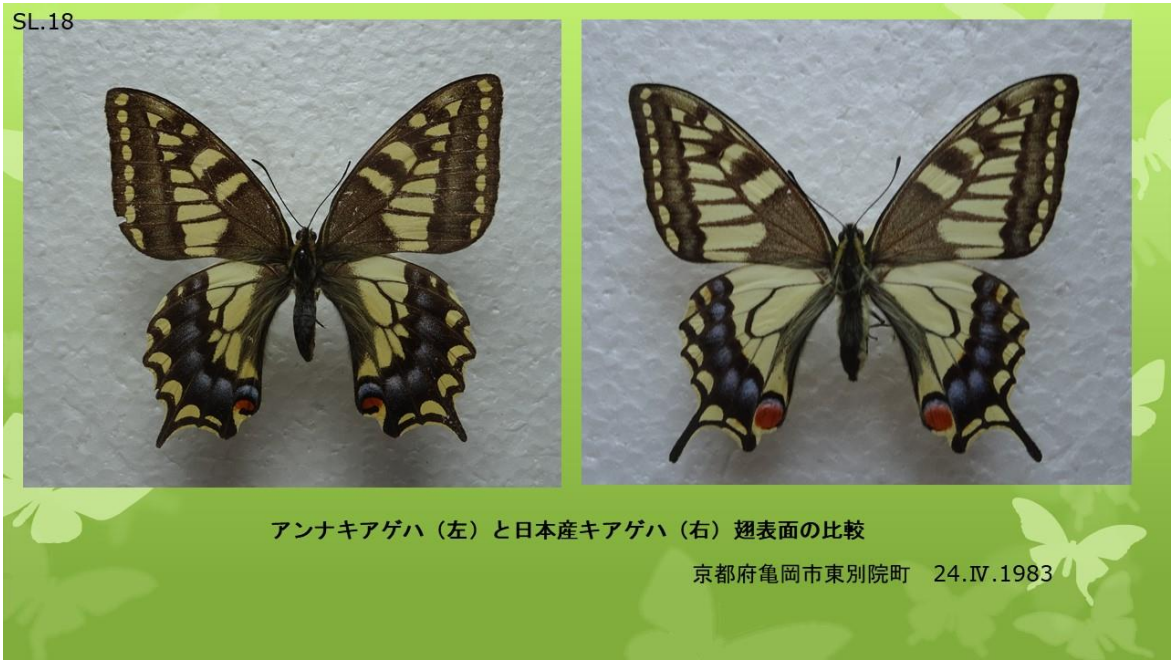
この採集行には、地元チベットの科学技術協会より派遣された役人が同行した。このため地元民の通報（と思われる）により警察が来たが役人が同行していたため問題は無かった。

採集は難しいと思われるが丁度全長約２０００キロ米の青蔵鉄道が開通し高所を走るため生息地を見ることはできるだろう。招待所と呼ばれる宿泊地ではトイレが汚く閉口した。チベットにはダライラマの居住地であったポタラ宮殿や世界遺産のダライラマ 5 世の霊塔など観光資源もある。

Ｑ＆A

① シジミチョウが少ないのは採集地が高標高すぎたためと思われる。
② 警察が臨時のゲートを作り通行料として賄賂を取られた。
③ 標本は帰国の際持ち帰らず後で郵送してもらった。
④ その後の採集・調査が許可されなかった理由の一つは、チベットの研究者による研究が進んだことも理由の一つであろう。
⑤ コリアスは採り難くツアーで得られた２種の内１種のみ採集できた。
⑥ ディベルナールシロチョウの黒い♂は同地での新見地かも知れない。

（企画担当幹事作成）



【付録】

『津の交通マナー』

一昨年、まだ川崎に住んでいた頃、ニュースを見ていたら「三重県は、信号機のない横断歩道での一時停止率が 3.4%と全国最下位でした」と報じられました。「アリャマー！」と驚くとともに、わき目もふらずブッ飛ばすドライバーを想像して、何となく違和感をもったものです。その後、三重県警が一時停止しない車を片っ端から引っ捕らえたとかで、最近ではずいぶん改善したようです。

そして、半世紀ぶりに津で暮らすようになってまたまた驚いたのは、信号待ちなどで前に 1 台以上のスペースを開けて停まる車がやたら多いことです。大きな駐車場の出入口や側道がある場合には理解できるのですが、そんなものが何もない片側 3 車線の国道でも、数台に 1 台は前をすごく開けて停まっているのです。時にはパトカーも。ナゼなんだろー。

さらに、青信号で交差点を右左折するときや側道に入るときなど、曲がる前にほとんど停車状態になる車が多いのにもビックリ。何度も追突しそうになりました。雪国でもないのに・・・。加えて、曲がるときに前もってウインカーを出さない車も多く、この二つが重なると超危険。「何をしたいの？？？」と思っていると、おもむろにウインカーを出しながら曲がってゆくのです。

仕事柄あちこちで暮らしてきましたが、こんなのは初めて。慎重に運転しすぎるためかと思い、免許更新の際に「何か特別の指導とかしているのですか」と質問してみました。そしたら、「単なるクセやないやろか」とのお返事。よく見ていると、そんな車ほど無理な右折や信号無視もしがちな様子。要は、良く言えばマイペース、悪く言えば漫然と自己中で運転している人が多い、ということのようです。

県外出身者や最近移ってきた連中と喋っていて盛り上がるのは、この交通マナーの話です。「一方通行はバックで逆走したら違反にならへんて言うてるオッサンおるで」、「軽のオバハン、信号が赤になったら歩道通って曲がってったわ」、「せやけど、そんなんでも免許取り上げられてへんねんな」、「ホンマこわいわー」。って言うか、ワタシも三重県人、津で生まれ育ったんですけど・・・。フクザツ。